

第29回 ICSU総会

ハマダラカとの戦いの果てに

日本学術会議第20期副会長・連携会員、中央大学教授、慶應義塾大学名誉教授 土居範久



黒田玲子第三部会員が副会長に選出される

第29回ICSU総会が平成20年10月21日から24日までマプト（モザンビーク）で開催された。その総会において、黒田玲子第三部会員がICSU副会長（渉外担当）に選出された。日本学術会議からのICSU役員は1963年に茅誠司会長が副会長に、1999年に吉川弘之会長が会長に選出されて以来のことであり、画期的なことである。任期は次回総会（2011年）までの3年である。

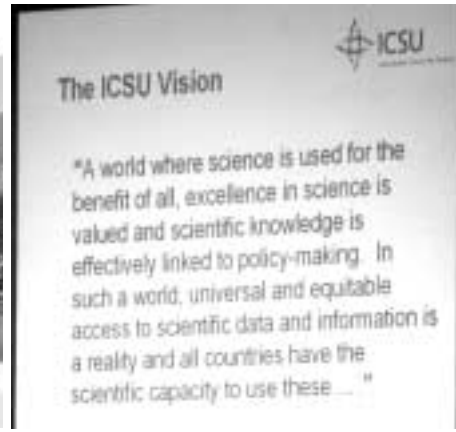
選出までのおよその経過は以下のようなものである。まず、本年2月11日にICSU本部に黒田玲子先生のノミネーションフォームを日本学術会議から送付。6月24日、ICSU事務局より黒田先生が最終候補者2名の内の一人に残った旨の知らせを受ける。10月22日の夕刻、黒田先生が総会でスピーチ。そして、10月23日が投票日であった。

ICSUについて

ICSU (International Council for Science : 国際科学会議)は1931年設立の非政府、非営利の国際学術機関(事務局はパリ)で、学問分野を代表する30の国際学術団体と各国・地域を代表する114の国家科学アカデミーの双方を束ねる科学者コミュニティの国際的な要となる機関である。

加盟国際学術団体は確立された学問分野の国際連合で、冥王星の取り扱いを決めたIAU(国際天文学連合)、数学のフィールズ賞を出すIMU(国際数学連合)、元素名や化合物名についての国際基準を制定しているIUPAC(国際純正・応用化学連合)など、その分野の主軸となる団体である。

加盟国家科学アカデミー会員は、全米科学アカデミー、英国王立協会、ロシア科学アカデミーなど各国・地域を代表する科



左：会場となった
‘ Joaquim Chissano ’
国際会議センター
右：プレゼン資料
(ICSU Vision)から

学アカデミーである。日本学術会議はICSUの設立以来（1949年以前は学術研究会議）国家科学アカデミーとして加入しており、分担金額は米国に次いで第2位という立場にある。

また、ICSUはUNESCO（国際連合教育科学文化機関）と国際的学術の促進と発展のために密接な協力関係にあるほか、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の学術的背景となっているWCRP（世界気候研究計画）など多くの国際共同研究計画を展開している。

このように、ICSUは科学者コミュニティの国際的な要であり、その活動は多岐にわたり、世界の科学技術の発展を先導している極めて重要な団体なのである。

黒田玲子副会長は、このようなICSUにあって、UNESCO、IAC（InterAcademy Council）、IAP（InterAcademy Panel）、UN（国連）、WHO（世界保健機構）、WIPO（世界知的所有権機関）などとの協力をより緊密にすること、

ICSUの活動を外から今まで以上に見えるようにすることなどであり、極めて重要な要職を担っているのである。

もうひとつの重要な案件

我が国にとっては重要な案件がもうひとつあった。3年後から、GDP（国内総生産）にある意味で比例した分担金を支払うことになったのだが、問題は総会での投票数である。現在は各国家科学アカデミーが1票ずつになっていて、今回の場合には96の科学アカデミーと29の国際学術団体とが50%対50%という規則になっている。しかし、科学アカデミーの分担金の区分が51区分もあったのを10区分に改定して最下位を1,000ユーロにしたのはよいとして、上位は値上げが大幅であり、上位6カ国で分担金の70%弱になることから、一切の反対給付がないのは具合が悪かろうということで、区分に応じて10から1の投票数を割り当てる加重投票案が出された。また、

国際学術団体は収支にあわせて4区分に整理された。しかし、最終的には、民主主義のルールに反するとして、「1メンバー1ポート」にするという案が出され、事前に、各加盟団体に意見が求められた。我が国は、当初より、加重投票を主張しており、改めて、値上げと同時に加重投票の導入を求めた。しかし、「1メンバー1ポート」案が総会に諮られることになった。

総会前日、科学アカデミーと国際学術団体との会合が別々に開催された。この会合で「1メンバー1ポート」案の説明がなされると、発展途上国からは当然だという意見が出された。これは、予想されたことである。米国が異論を唱えた。そして、我が国も唐木英明副会長が国情を踏まえて異論を唱えた。英国は、現状と何も変わらないという決議はいかがなものかという異論を唱えた。

総会では、23日に当該議案が出されたが、議論百出の末、次回総

ハマダラカとの戦いの果てに

会までに執行部で再検討することになり、投票権の加重は行わないとした決議は取り下げられた。

その他の議案

詳細については日本学術会議のホームページ (<http://www.scj.go.jp/>) を見ていただくとして、総会の模様のおおよそは次のとおりである。

総会は21日の夕刻、マブートの国際会議場でモザンビーク大統領の歓迎挨拶から始まった。主催者によるレセプションは国際会議場の庭に張られた巨大なテント内で大統領、科学技術担当大臣列席のもとで行われた。以後、この巨大なテントで昼食をとることになる。

会議は22日の9:00から。戦略計画2006 - 2011の進捗状況、IPY(国際極年)、向こう10年にわたる新規プログラムIRDR(Integrated Research on Disaster Risk)、Ecosystem Change and Human Well-beingの承認; Health and Well-being in the Changing Urban Environmentに係るinitiativeの推進などを承認後、役員候補者による7分間のスピーチ。

23日は8:30から開始。ESSP(Earth System Science Partnership)、IGBP(International

Geosphere-Biosphere Programme)、WCRP(World Climate Research Programme)、IHDP(International Human Dimensions Programme on Global Environmental Change)などGlobal Environment Change Programの報告; SCOPE(Scientific Committee on Problems of the Environment)のICSU Interdisciplinary Bodyとしての活動は2年以内の経過措置を経た後、終わらせることの承認; CFSR(Committee on Freedom and Responsibility in the conduct of Science)の報告; ICSUと社会科学との係わり合いを拡大することの承認; 役員選挙; SCID(Strategic Committee on Information and Data)の報告; 3カ所にあるRegional Officeの報告とアラブ地域のRegional Officeの推進の承認; PCDC(Policy Committee on Developing Countries)の報告と当面休止状態に置くことの承認など。

24日は時間を変更して8:30から開始。次のStrategic Plan 2012 - 2017進捗計画について; 分担金について; 財務報告と予算の承認; 常任理事の選挙; 新規メンバーとしてIUIS(International Union of Immunological Socie-

ties)をScientific Unionとして、4S(Society for Social Studies for Sciences)をScientific Associateとして承認(我が国は4Sについては反対); 次期会長挨拶、モザンビーク科学技術担当大臣挨拶、モザンビーク首相挨拶; 決議内容の承認。次回総会はローマで、次々回は台湾で開催することを承認。

25日は8:00から13:30まで新執行部による初会議。その後昼食会。黒田先生は副会長として出席。この会議には陪席することは一切許されなかった。

新執行部

選挙の結果、新執行部の構成は以下ようになった。

(1) 役員

会長、副会長2名(科学計画・評価担当、渉外担当)、事務総長、財務役員、前会長または次期会長(18カ月で交代)の6名から構成。

会長

Catherine Brechignac(フランス)

副会長(科学計画・評価担当)

Kari Raivio(フィンランド)

副会長(渉外担当)

黒田玲子(日本)

事務総長

Murice Tchuente(カメルーン)

財務役員

Hans-Rudolf Ott (スイス)

前会長

Goverdhan Mehta (インド)

次期会長

Yuan-Tseh Lee (台湾)

(2) 常任理事

国家科学アカデミーから選出された4名と国際学術団体から選出された4名。任期は3年で、1回の再任が可能である。

国家科学アカデミー：

Fu Congbin (中国)

Maurizio Iaccarino (イタリア)

Sergio Pastrana (キューバ)

Abdul Hamid Zakri (マレーシア)

国際学術団体：

Bryan Henry (IUPAC、カナダ)

Dov Jaron (IUPESM、米国)

Bruce Overmier (IUPsyS、米国)

Uri Shamir (IUGG、イスラエル)

ハマダラカとの闘い

マラリア対策には大変苦慮した。まずは、副作用が強いといわれる予防薬を飲むかどうかである。英国王立協会副会長のキャセルトンさんやICSU 役員のエリオットさんなどからは、彼らが服用する副作用のない(少ない?) Malarone という予防薬を勧められたが、我が国では認可されていない薬だった。潜伏期間が10日

から12日ということで、もし発病したとしても国内のしかるべき病院に行けばよからうということになり、予防薬は飲まないことにした。

そうなる、次はいかに蚊から身を守るかである。まず、蚊帳を入手することからはじめた。住友化学(株)が作っている蚊帳がアフリカで大活躍しているということで、黒田先生から住友化学(株)にお願いしてもらったが携帯用ではないということで、数種類の携帯用電気式蚊取り器と数時間継続して効力がある殺虫剤などをお送りいただいた。これらが大変役に立った。蚊帳はインターネットで探し優れたものを求めた。さらには、大学の学科の秘書さんからは、えらいところへ行かれるそうだと、腕時計式の電気蚊取り器と虫除けのペーストを頂いた。これらに加えさらに、形式の異なる携帯用電気式蚊取り器やら虫除けスプレーやらを購入してもって行った。大型の旅行かばんの半分はこれらで埋まった。南アフリカのアレキサンドリア空港でマプート行きに乗り継ぐ時点から身につけた。腕時計式は足首に小型の携帯用は首から提げ、据え置き型にはストラップを通して携帯し足元へ置いた。



上：総会で演説する黒田玲子会員
下：総会の模様

ハマダラカとの戦いの果てに

上：在モザンビーク日本大使館にてモザンビーク科学技術担当大臣と

中：瀬川在モザンビーク特命全権大使表敬（右から2人目）

下：Yuan Tseh Lee ICSU次期会長と黒田玲子会員



帰るまで、長袖のシャツを着て、この格好を買いた。夜はベッドに蚊帳をセットし、部屋の隅々には長時間効果が持続する殺虫剤をまき、据え置き式の電気式蚊取り器を2台セットして寝るのである。朝食時から装備をし、会場では重装備をした。

午後5時になると蚊はお出ましになり、午前7時にお帰りになるとのことだが、ホテルも会場もあちこちが開け放たれているので、日中といえども、暗いところでは特に、蚊が飛び回っていた。

それだけしても何かに刺されたような痕跡はあるし、痒い。発病するのかもしれないのは神のみぞ知るところである。

謝辞

マブートに到着した21日の夕刻、瀬川進特命全権大使に在モザンビーク日本大使公邸での夕食会にご招待いただいた。モザンビークの科学技術担当大臣を交えての夕食会を予定されていたが、大臣は公務多忙で、ワインを飲みながらの歓談だけで帰られた。夕食に出された、モザンビーク特産の伊勢海老がおいしかったこと。

この日から、帰国するまで、瀬川進大使、木宮憲市参事官はじめ大使館の方々には大変お世話にな

った。治安が悪く、ガイドブックによると、我々のホテル周辺がもっとも危ない地域であったこともあって、ホテルと会場との間は日本大使館の車にお世話になり、ホテルからも会場からも一歩も出ることなく過ごした。到着時に空港で多少のトラブルがあったこともあり、帰国時には大使館の方々がホテルまで迎えに来てくださり、空港では、通関するところまで、すべて面倒を見てくださった。瀬川進大使および在モザンビーク日本大使館の方々に改めて感謝いたします。

また、住友化学(株)には、マラリア対策にご協力いただいたことに、感謝いたします。

最後になりますが、今回の副会長選につきましては、吉川弘之先生、金澤一郎会長、加盟国際学術団体関連でご協力いただいた多くの先生方をはじめお世話になりました皆様方に感謝いたしますとともに御礼を申し上げます。

本稿をまとめるにあたっては、唐木英明副会長、黒田玲子第三部会員、綱木雅敏次長、大野富仁夫課長補佐、中村典子課長補佐にお世話になった。「ICSUについて」の項は、事務局の国際担当が作成した資料を使わせていただいた。